

昔むかし、あるところに、貧しい男の子がいました。

ある日のこと、お母さんが、男の子にいました。

「うちは貧乏だからなあ。ここに卵が三つあるから、町へ持って行って売っておいで。

売れたらそのお金で、さとうとコーヒーを少し買って来ておくれ」

お母さんは、卵をかごに入れて、男の子に渡しました。

男の子は、出かけて行きました。町の近くまで来たとき、かごを手から落つこととしてしまいました。卵は三つとも割れてしまいました。男の子は泣き出しました。そこへ、見たことのないおじさんがやって来て、

「ぼうや、どうして泣いているんだね」とききました。

「お母さんから、卵を三つ預かって売りに行くところだったんだ。だけど、みんな割れちゃったんで、おさとうとコーヒーを買えなくなっちゃった。うちは、とっても貧乏なんだ」

「そうか。じゃあ、ぼうや、この十スー^{*}をおまえにやるよ。これで、なべをふたつと、刷毛^{はけ}を二本お買い。一方のなべに卵の黄身を入れて、もう一方のなべに卵の白身を入れるんだ。それを持って町に行つて、『おしりの金めつき！おしりの銀めつき！』と、呼んで歩いてごらん」

男の子は、おじさんのいったとおり、なべと刷毛を買つて来て、それぞれ黄身と白身を入れました。そして、町に行つて、「おしりの金めつき！おしりの銀めつき！」と呼びました。すると、女の人が、窓から顔を出して、

「あんた、そこで何売ってるの」とききました。

「おしりの金めつき！おしりの銀めつき！」

「ふうん。金めつきするのいくらかかるの？」

「二百フラン^{*}ケンだよ」

「じゃあ、銀めつきは？」

「百フランケン」

「なぜ金めつきは二百フランケンで、銀めつきは百フランケンなの？」

「だって、金めつきは銀めつきよりずっときれいだもん」

「じゃあ、上がっておいで。あたしのおしりに金めつきしてちょうだい」

「いいよ。だけど、前払いだよ」

男の子は、家が上がって、二百フランケン受けとると、女の人に、いすに横になるようにいました。それから、女の人のおしりに、刷毛で卵の黄身を塗りました。

「めつきがかわくまで十五分間そのまま横になってるんだよ」

男の子は、そういつて家を出て行きました。

男の子と入れ違いに、女の人のお旦那さん^{旦那}が帰って来ました。旦那さんが戸をたたくと、中から女の人がさけびました。

「おしりがかわくまで、ちよつと待って」

「おまえ、いったい何をしたんだ」と、旦那さんは聞きました。

「あのね、おしりに金めつきしてもらったんだよ」

「なんだって！ひどいいたずらをするやつだ。おまえ、そんなのにひっかかるなんて、なんてばかなんだ」

旦那さんは、さつきすれ違った男の子を追いかけてました。

男の子は、急いで服を裏返しに着て、畑でジャガイモをほっていたおばあさんの所に走って行きました。そして、

「このジャガイモの葉っぱの山の中にもぐってもらいたいんだけど」とたのみました。おばあさんは、

「五フランケンくれたらやってやるよ」といいました。男の子は、五フランケン渡して、おばあさんに、ジャガイモの葉っぱの山にもぐってもらいました。そして、おばあさんのスカートをめくって、親指をおばあさんのおしりの穴に当てて待っていました。そこへ、旦那さんがやって来ました。

「ぼうや、だれかここを通らなかったかい」

「通ったよ。男の子がひとり通って行ったよ。おじさんのこと見たら走りだしたよ」

「まだ追いつけそうかな」

「難しいだろうな。おじさん、この辺の道を知らないだろう」

「おまえならつかまえられるかい」

「もちろん。だけど、ぼくは今ここから離れられないんだ。おとうさんがはちの群れを見つけて、巣箱を取りに行ってるんだ。ぼく、お父さんがもどって来るまで、はちが逃

げないように、この穴をふさいでないとだめなんだ。でないと、女王ばちは逃げてしま
うし、はちたちが大あばれするから」

男の子がいうと、旦那さんはいいました。

「なんだ、それだけのことなら、おれが穴を押さえておこう。おまえはあいつをつかま
えてくれ」

男の子は、走り出しました。

いきなり、葉っぱの下でおばあさんがさけびました。

「ぼうや。五フランケンにしては、指をおしりの穴に当て
ているのが長すぎやしないかい」

旦那さんは、びっくりしてさけびました。

「ひゃあ！あいつ、おれまでだましやがった！」

おしまい



*スー スイスのフランス語圏の古いお金の単位。

*フランケン スイスフラン。スイスのお金の単位。

村上郁 再話

資料 『世界の民話1ドイツ・スイス』 小澤俊夫訳／ぎょうせい